

# 古墳時代初頭の大型建物群跡

万行遺跡は、七尾市街地から東に2kmほど離れた万行町地内に所在する。石動山系から延びる低台地の先端部に位置し、西側には赤星川、東側には白池川が流れ、北側に七尾南湾を臨む。

土地区画整理事業に伴い、平成8年から9年にかけて172箇所を試掘調査したところ、縄文から近世の複合遺跡であることが分かった。本調査は、平成10年度から開始し、弥生時代後期から古墳時代にかけての竪穴建物跡など、遺構・遺物が数多く発見された。

なかでも、特筆すべき遺構は、平成13年度に発見された古墳時代初頭の国内最大級の大型掘立柱建物群である。柱穴が1.5mを越え、ひと一人がすっぽり入るほどの大きさである。柱根は残っていないが、柱痕跡から直径40cm大の柱が使用されていたと推測できた。大型建物群は、2条の溝(柵または塀の可能性もある)によって南北74m、東西39m以上の範囲を区画された中に計6棟発見されており、西群(3棟)と東群(3棟)に大きく分かれる。

建物はすべて東西棟で、西群(SB01・02・03)は東側に庇が付属し、東群(SB04・05・06)は西側に庇が付属する。なお、大型建物群は、まず西群が造営され、その後東群に建替えられたものと思われる。また、この大型建物群が廃絶した直後に幅1.2m、深さ0.5m、一辺22.5mの方形区画が造営される。内部の建物や配置構造は復元できていないが、類例から首長の居館と考えられる。

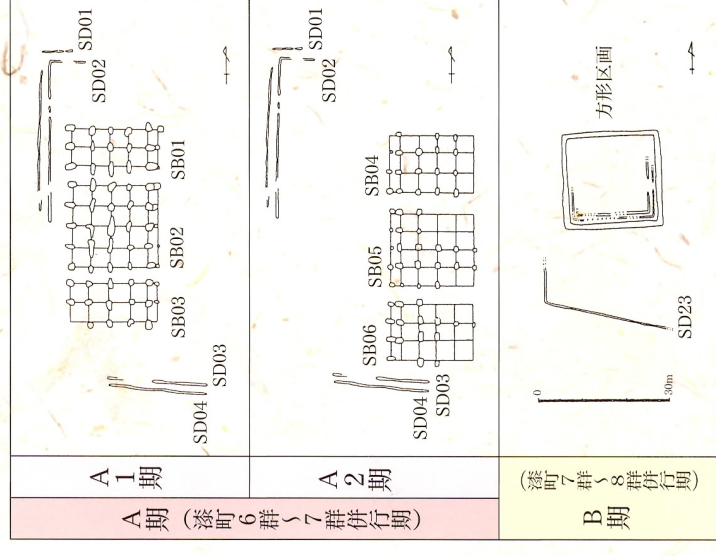
この大型掘立柱建物群の性格については、総柱式の建物が整然と並ぶ点や海に面した立地から、倉庫群と考えているが、倉庫としては大き過ぎることから祭殿(1棟)の可能性もある。また、造営主体については、能登一地域だけではなく、いくつかのクニ(越中や越後など)が連合して造営したとする説とヤマト政権が直接関与していたとする説があるが、結論は出ていない。

いずれにしても、古墳時代初頭という時期に高度な測量技術と建築技術を駆使し、巨大な建物群を造営した集団が七尾湾に存在したことは、日本の国家形成を考える上で、また建築史の面から見ても極めて重要な遺跡である。

建物	桁行	梁行	床面積
SB01	4間(17.4m)	2間(8.4m)	146㎡
SB02	4間(17.1m)	4間(18.3m)	313㎡
SB03	4間(17.4m)	2間(8.4m)	146㎡
SB04	4間(17.4m)	3間(13.2m)	230㎡
SB05	4間(17.1m)	4間(16.5m)	282㎡
SB06	4間(16.5m)	3間(12.3m)	203㎡



大型建物群と方形区画変遷模式図

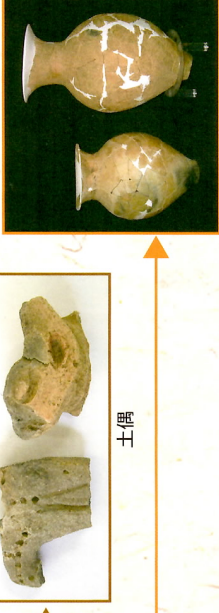
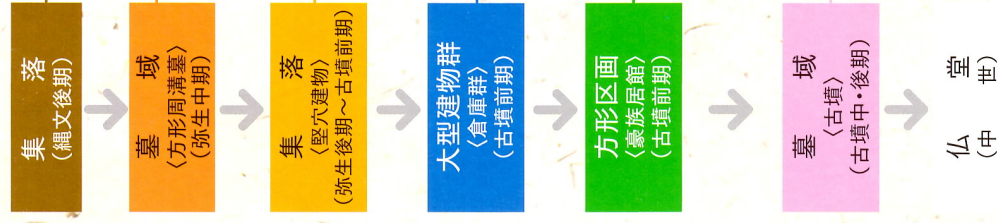


板塀西側(南から見る)



SB02 柱穴

## 遺跡の変遷



方形周溝墓出土壺

土偶



大型建物群西群(SB01~SB03) 遠景(南から)



古墳に副葬された須恵器(はそう)と土師器の壺(かめ)



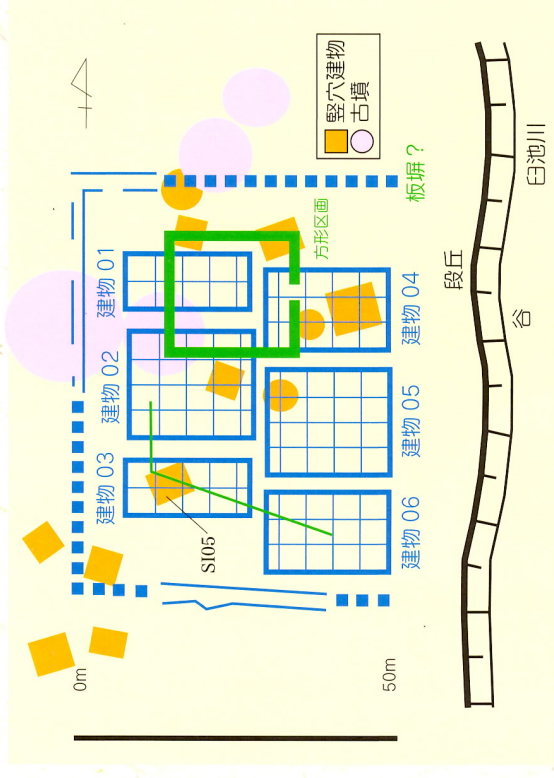
竪穴建物(SB05)



方形区画南東隅



鹿福寺(ケイフクジ)という字名が残る。懸仏や瓦経、天目茶壺、掘立柱建物が発見された。



図で見る万行遺跡の中心部



SB06 柱穴